

林京香さん 6年生



障害者差別解消法が施行されて1年。写真は昨年2月「広報なごや」。
レポートでも紹介したが、当時、副市長だった岩城正光さんが座談会
の司会をしていた。昨日、岩城さんが立候補する名古屋市長選挙が告示された。

京ちゃん、林京香さんと初めて会って3年半余り。あのときは名古屋市立堀田小学校
2年生だった。あれから3年。4月からは6年生として、元気に通学している。地域の
「分団長」として、登校の指揮をとる。学校では1年生の世話をする。

私も京香さんから多くのことを学び、レポートに書いてきた。日本経済新聞4月6日
朝刊「私見卓見」で、吉村泰典・慶応大名誉教授が「障害が個性の一つとされる社会に」
と題して書いていた。京ちゃんのご家族への私の気持ちと通じるところが多い。

子が障害をもっていると分かったときに、これから先どのように生きていけるか、自
分たちがいなくなったらこの子どもはどうなるのかなど、家族はこれまでにない不安に
さらされる。その悲しみや苦しみは痛いほどわかる。だが、本当の問題は障害それ自身
ではなく、社会のほうにあるのではないだろうか。

誰もが子供に障害があったとしても、幸せに生きていってほしいと考える。しかし、
現実の社会を見ると障害をもって生まれてきた子が必ずしも幸せな人生を送っている
とは限らない。これまでの社会は、障害をもった人と家族が差別や負担にもがき苦しむ
ような社会だったと思う。

障害をもつ子どもが生まれても、不安なく育てていける社会であるならば、出生前診
断などで命の選択をしなくてもよくなるのではないか。

そのためには社会の人々が、障害に対して正しい知識を持ち、障害をもつ人とともに
生きる社会の実現を目指す必要がある。マイノリティーの声に耳を傾け、彼らの権利を
守り、彼らが安心して暮らせるような仕組み築く必要がある。

そうすれば障害そのものが障害でなくなっていく。「障害をもつ人」ではなく、「障害
のある人」との考え方ができるようになる。つまり障害は個性の一つとして捉えられる。
個性が尊重されることで、より多様性ある社会になっていくだろう。健常者は、障害の
ある人から実に多くのことを学ぶ。障害のある子どもと出会った親の多くは、障害に対
する価値観や、人生や生活の質が変わることを認識する。障害のある人の成長に励まされ、
彼らの優しさに触れ、温かさに気付かされる。人を幸せにする力により癒やされて
いく自分に気付くことになる。障害のある人が安心して生きられる社会は、だれもが生
きやすい社会である。

(2017年4月10日)